

〔科目名〕 学習導入演習	〔単位数〕 2 単位	〔科目区分〕 アカデミック コモンベシックス
〔担当者〕 横手一彦 YOKOTE Kazuhiko	〔オフィス・アワー〕 時間： 開講時に提示する 場所： 横手研究室(六階 616)	
〔科目の概要〕 大学で〈学ぶ〉ということは、どういうことなのだろう。高校までの勉強と、どこが同じで、どこからが違うのだろう。大学一年、入学した春学期の、そのような戸惑いは当然であり、自然なことでもある。 この科目は、粗々にではあるが、「学習」という土台の上に、大学における一つの筋道を示すような形で、そのような疑問や不安に応えるようとする科目である。新しい学問領域に接するではなく、〈学ぶ〉ということに対しただの応答が目的の一つである。そのため、大学教育への入門的な内容になる。 ひとり一人が、今後の四年間を見据えて、その初年度の春学期に、〈学ぶ〉という自覚と姿勢を自らに引き寄せる。教員が立つ位置は、それらを側面的に支援するところにある。側面的に、という以上に進むことが出来ない。 〈学ぶ〉ということは、〈勉強〉とは、やはり違う。その部分を、最も大切にしたい。 それらを踏まえ、自分が文章を書く、自分の論文に仕上げる、という主たる方向へ段階的に進む。		
〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか〕 それまで、気づけなかったことに気付く。しなかったことを知る。それらは、単純なようで、それほどに簡単ではなく、意外なほどに深い意味を持っている。そこに、自らの意欲との関わりがある。 自分が〈学ぶ〉一面に、自分以外の誰かの〈学ぶ〉という他面を重ねることで、これまでの自分の〈学ぶ〉という行為に自覚的になる。これは大切な点であり、それに正面から向き合おうとすれば、相手(他者)は、意外なほどに手強いし、また凄い存在である。 これまでと、今に立ち返り、もう一度見つめ直せば、必ずしも十分ではなかった自分に気づく。この隙間(すきま)を埋める。自分が、自分の、である。誰かが手助けしてくれるが、その代理や代弁を務めることはない。 大学で〈学ぶ〉というプロセスは、約(つづ)めれば、物や事や人や考え方や情報などに向き合い、そこから特定の領域を対象化し、自らの課題を発見する。そして、分類し、分析し、考察を深め、独自に調査し、さらに議論を重ね、論究を続ける。そのような、連続する流れとしてある。その成果の多くは、レポートという形にまとめられる。 それらを、意図的に、段階的に、積み上げる。そのことで、自らが〈学ぶ〉という自覚と、自らが〈学ぶ〉という姿勢を引き寄せる。それらのことは、大学という場で〈学ぶ〉基礎となる。 そこでは、自分が自分を励ます以外に手立てはない。自分が書いたレポートに、自分を励ます自分の力が宿る。〈学ぶ〉階梯の自立的な歩みは、大学四年間の〈学び〉の要になる。		
〔科目の到達目標（最終目標・中間目標）〕 〔中間目標〕 幾つか問題について意見を交換し、相互の理解を深める。それらを文字化して表現する。 1. 方法的接近(本という形態・基礎的な理解・幾つかの簡素な論理・古い図書館・外国の図書館・今の図書館) 2. 方法的接近の具体例(級友や図書館文献や文献検索やネット情報) 3. 口頭発表(本に学ぶ) 〔最終目標〕 自分が、〈学ぶ〉主体であると気付き、実践を重ねる。小レポートや課題レポートの作成を通じ、自らが〈学ぶ〉ことに対し、自覚的に、意欲的になる。それを最終目標とする。 1. 実践例に学ぶ(批判的な論究) 2. 課題意識、関連資料の収集と整理、分析的思考と論理に基づいた構想力。それらを文字化する(レポート作成)		
〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕 1. 教壇に立つ側が饒舌に過ぎる場合がある。それを自戒し、教場における学ぶ主体は、学生であると自重する。 2. 教員の用意する話題が、脈絡に欠けると受け取られた時があった。一部の話題を組み立て直し、流れのある展開となることを心掛ける。話題が、多種、多様であるという性格は維持する。 3. レポートの書き方について、事例を紹介し、その実践を求める。		

〔教科書〕 なし	
〔指定図書〕 なし	
〔参考書〕 佐藤望編著『アカデミック・スキルズ大学生のための知的技法入門』第2版、2016、慶應義塾大学出版会 など	
〔前提科目〕 なし	
〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等) 教場における積極的な姿勢や課題解決への意欲など2割、口頭発表1割、小レポート2割、課題レポート5割。	
〔評価の基準及びスケール〕 A: 100点～80点 B: 79点～70点 C: 69点～60点 D: 59点～50点 F: 49点～0点	
〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕 自らが〈学ぶ〉という意欲。 級友と〈学び〉、級友から〈学ぶ〉という意識。その姿勢への共感。 レポートという表現行為への深い関わりと実践。	
授業スケジュール	
第1回	テーマ(何を学ぶか): 科目導入の初期段階への接近 内 容: 1. 大学というところ 2. 大学生ということ 3. 自分が学ぶ 4. 高校生と大学生 5. 中学生と高校生と大学生 始めの話題: 例えば桜が咲く 教科書・指定図書 なし 以下同じ
第2回	テーマ(何を学ぶか): 教員による科目内容の方向付け 内 容: 1. 各自の事前学習 2. 大学図書館というところ 3. 図書館図書の選定(新書版程度) 4. 口頭発表(本に学ぶ 5分程度 3人) 5. レポート以前の文章 始めの話題: 例えば蜂の巣箱 教科書・指定図書
第3回	テーマ(何を学ぶか): これまで自分 今の自分 これからの自分 内 容: 1. 自分の過不足 2. 今の自分に必要なこと 3. 方向性・構想・具体的な展開 4. 考えるということ 始めの話題: 例えば西行 教科書・指定図書
第4回	テーマ(何を学ぶか): 多様な知1——教科書と教科書以外に学ぶ1 内 容: 1. 科学的思考 2. 大学という教育機関 3. 他人が組み立てた思考方法を学ぶ 4. 自分と自分以外との関わり 5. 研究ということ 始めの話題: 例えば広瀬淡窓 教科書・指定図書
第5回	テーマ(何を学ぶか): 多様な知2——教科書と教科書以外に学ぶ2 内 容: 1. 戦前の新潟の農民の子 2. 小学校を卒業した後に大学の教壇に立つ 3. 戦後の大阪生まれの子 4. 高校を卒業した後に大学の教壇に立つ 5. 改めて自分を考える 6. 小レポート作成 始めの話題: 例えば手を洗う(日常の行為) 教科書・指定図書

第6回	テーマ(何を学ぶか): 多様な知3——教科書と教科書以外に学ぶ3 内 容: 1. 学内の施設訪問(施設見学だけを目的としない 雨天等の場合は順延) 2. 施設を実見 施設の設計構想 構想を形にする 教科書・指定図書
第7回	テーマ(何を学ぶか): 中間的のまとめ 内 容: 1. もう一度——大学というところ 大学生ということ 自分を語るということ 2. 現代に生きる 現代を生き続ける 3. 学生の小レポート紹介 始めの話題: 例えば文字の歴史 教科書・指定図書
第8回	テーマ(何を学ぶか): 人類史的な系譜——ヒトと人 内 容: 1. ヒト 2. 種と採取と栽培 針と糸 3. 人に生まれる→人となる 4. 人として歩む→人として生きる 始めの話題: 例えば人文と社会と自然 教科書・指定図書
第9回	テーマ(何を学ぶか): 人として生きる 内 容: 1. 学びの四パターン 2. 学問への切っ掛け 3. 真っ当に生きる 4. 小レポート作成 始めの話題: 石器と縄文と弥生の想像力(個別話題の終わり→要望があれば継続) 教科書・指定図書
第10回	テーマ(何を学ぶか): 「3.11」に学ぶ1 内 容: 1. 「3.11」に学ぶ 2. 破壊の現実生きる 3. 出来事に学ぶ 経験に学ぶ 人に学ぶ 考え方に学ぶ 教科書・指定図書
第11回	テーマ(何を学ぶか): 「3.11」に学ぶ2 内 容: 1. レポートを書くために 2. レポート作成の目論見書の作成 教科書・指定図書
第12回	テーマ(何を学ぶか): レポート作成の実践1 内 容: 文字で表現するということ 文章表現の基礎的な項目 教科書・指定図書
第13回	テーマ(何を学ぶか): レポート作成の実践2 内 容: 意見の交換と文章の手直し 教科書・指定図書
第14回	テーマ(何を学ぶか): レポート作成の実践3(レポート作成の最終段階) 内 容: 論理的な展開 主張の明確化 文章全体の再検討 教科書・指定図書
第15回	テーマ(何を学ぶか): 〈学ぶ〉ということ まとめ 内 容: 1. 15回の演習を振り返る 2. 要点を確認する 3. 意見の交換 4. 自らの到達点の確認 5. 自らの未達点の確認 教科書・指定図書
試 験	基本的に「3.11」の4000字レポート提出を求める(学生の要望により個別課題の場合もある・要相談)